

P-071

療育施設通所小児の車内での幼児拘束装置の装着状況調査

小濱 守安

沖縄南部療育医療センター

【目的】 療育施設利用中の15歳未満児の装着状況を調査し、今後の装着啓蒙や指導に活用する【研究方法と対象】 療育施設で通所でリハビリ中の15歳未満児の保護者から直接聞き取り調査。聞き取り内容は、乳幼児拘束装置装着の有無、着座位置及び着座の向き、装着に関する困りごと。【調査期間】 2023年3月1日～2024年6月30日の15か月間。【結果】 対象児は276例(男児165例、女児112例)。6歳未満児142例、6歳以上15歳未満児134例である。平均月齢は 73.6 ± 43.4 か月。在胎週数 33.9 ± 6.1 週。出生体重 2125.0 ± 1028.5 g。チャイルドシート装着94例、月齢 31.6 ± 17.2 か月である。6歳未満児のチャイルドシート装着率は64.8%。助手席装着が23例で後ろ向き装着4例あり、気管切開中で頻回の吸引処置1例、嘔吐頻回1例、子どもが嫌がる1例であった。前向き装着18例中10例で座席を後方に下げていた。横向き装着が1例あった。後部席装着69例中、前向き装着51例、後ろ向き装着17例である。ジュニアシート装着が55例、月齢 74.9 ± 24.0 か月で助手席26例、後部席29例である。身障者用拘束装置装着が39人、月齢 101.8 ± 36.1 か月。助手席16例、後席23例。シートベルト装着50人、月齢 103.6 ± 34.3 か月で、助手席24例、後席36例。車内で固定なし23人、 88.6 ± 39.1 か月である。【考察】 今回の調査で不適切な装着もあったが、兄弟数や車種など物理的に装着が困難な状況もみられた。シートベルト固定によるチャイルドシートは定期的に固定の調整が必要であり、必要に応じ聞き取り後に助言を行った。2023年9月より、標準装着方式がISO-FIXとなった。普及には費用面での問題もあり今後の課題である。今後も調査を継続し、安全な装着の啓蒙に努めたい。

P-072

日本におけるSIDS・SUIDと睡眠環境に関する検討

角田八千代

岡山大学 学術研究院保健学域

【目的】 乳幼児突然死症候群(SIDS)、窒息に関連した予期せぬ睡眠中の乳幼児の突然死(SUID)は乳児の死亡の上位にあげられる。SUIDのリスクを減らすため、米国小児科学会(AAP)は乳児を仰向けに寝かす、柔らかい寝具を避ける、母乳で育てる、添寝をしない等の睡眠環境整備を推奨している。SIDSおよびSUIDリスク軽減のために日本における実態と睡眠環境を明らかにし、発生予防のための今後の課題について検討することを目的とする。【方法】 医中誌を用いて、「SIDS」「SUID」の用語で検索した。2016年～2025年2月までに発表され、家庭における睡眠環境に関する報告があった10文献を対象とした。【結果】 乳児窒息死、SUID、SIDS、乳児急死後に剖検した記録、カルテおよび母子健康手帳から睡眠環境調査を実施した文献は4件、病院の外来および乳児健診を受診時または自宅にて睡眠環境調査を実施した文献3件、SIDS普及啓発に関する文献は3件であった。乳児の急死からリスク因子を調査した結果では、いずれも男児で生後3か月以内の発生が多かった。また、出生順位は第2子以降に多く、添寝をしていた児の割合が多く寝具の共有や大人の寝具使用も報告されていた。入眠時の児の体位が腹臥位であった症例もあり、養育者の知識不足の可能性が指摘されていた。また、乳児を寝かせた時には仰臥位であったにも関わらず、異常発見時には腹臥位で発見されたとの報告もあった。健康な乳児を対象にした睡眠環境調査においては、生後2か月までの乳児に大人用寝具使用が3割あり、生後3～6か月では大人用寝具の使用の割合がより増加していた。睡眠環境の普及啓発においては、養育者のSIDSに関する知識が不足している点および啓発が実施されていない医療機関が少なくないこと、SUIDが積極的に啓発すべき問題と認識されていない医療機関がある可能性が示唆されていた。また、掛寝具ではなくスリーパー使用がSIDS予防においてAAPでは推奨されているが、スリーパーに関する報告はなかった。【考察】 SUIDおよびSIDS予防に関する普及啓発はなされているが、適切な睡眠環境に関する知識の周知は不十分であるため、今後、養育者に対してSIDSを含めたSUIDリスク軽減のため予防に関する知識の普及啓発を実施することが必要である。